

せ た か む い

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 4212590
第166号・平成15年7月1日

年表で読む

古平の歴史

《72》

小学校教育

■新地分教場と

群来尋常小学校の統合

明治一二年、浜中学校が開校し、その後、浜中小学校となつても、新地方面の児童は浜中小学校に通学していたが、明治二〇年、校内から出火して全焼した。そこで、これを機に新地方面にも小学校を創設することに

なり、とりあえず警察署跡の建物を利用して、明治一二年、二学級で新地小学校が開校した。

翌三二年、群来村に新地小学校群来分教場も創設されたが、校舎建築費は部落民からの借入金と寄付金によるものであり、校舎は恵比須神社下のくぼ地に建てられた。

明治二四年、開校間もない新地小学校と群来分教場は、浜中小学校の分校となつたが、明治三六年、群来校は群来尋常小学校として分離独立した。児童数は二八名であった。

明治四二年、児童数が増えたので現校舎のやや上に教室を増築したが、その後も児童は増え続け、大正六年には五五名と最高の児童数となった。

大正一二年一月、新地分教場の運動場が積雪で倒壊した。校舎の老朽化が進んでいることから、群来尋常小学校を統合し校舎を新築する案が町会で出されたが、これには群来村部落会からの反対陳情もあった。

しかし、群来村からの通学などの事情も考慮し、学校は新地

町と群来村のほぼ中間の地点と決まり、一年から四年までの四学級編成とすることとし、直ちに着工された。

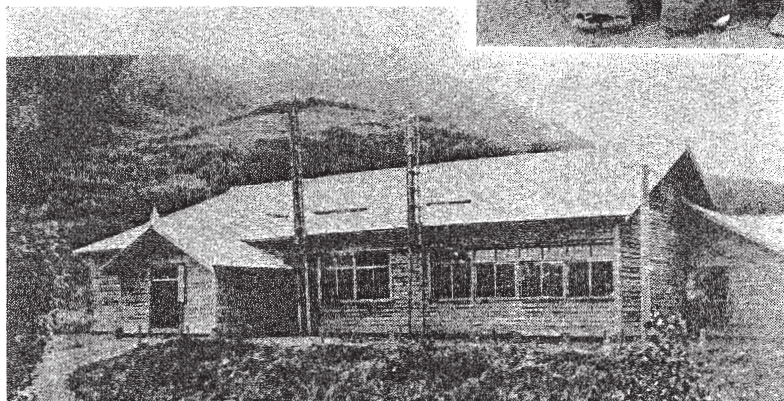
ところが落成間際に現校舎が火災に遭い、児童は一時本校に通つたが、同年二月、群来尋常小学校を統合して新地分教場落成式が行われた。

落成を記念し、醸造業を営み教科書の販売もしていた三泉

ユウからオルガン一台(価格二五〇円)が寄贈され、土地寄付者の藤沢勇蔵・高野常吉・高野名石蔵らと共に、町から表彰状と記念品が贈られた。



↑わずかに一枚残っている群来尋常小学校関係の写真
←四〇年の歴史を刻んだ新地分校(ふるびら温泉駐車場)



大正一一年

▼六月一日

今晩四時頃から雨がショボシヨボと降り出す。長らく天気であつたから仕方ない。日曜で子供らは学校は休みなので家の中は賑やかだ。店はヒマだ。たまにリングの袋の問い合わせがあるくらいのものだ。熊さんは雨降り休みを利用して掛け取りに出かけ、四〇〇円余りの集金があつた。熊木漁場からも三四〇円余りの入金があり、合計で七五〇円程になった。本日まで一万六千円位入金したので、あと六八〇〇円余りあるが、四五〇〇円位は確実に入金の見込み。一五〇〇円余りは明年になるかも知れぬ。しかし本年の如き不漁年に総金高の七分位の貸し残りはまず上首尾とせねばならぬ。雨休みで家中でリングの袋はりをやる。父や子供たちも手伝いをする。朝の富丸で弥生さんらが佐渡へ行く。夜になつても雨は止まず静かに降っている。

▼六月二日

今日も朝からの小雨止まぬ。農園の仕事もできないので袋は

りをする。明日、学校の運動会だつたがこの雨で一四日に延期になった。

▼六月三日

今日も小雨が続く。熊さんらは農園へ巢虫をとりに行ったがますます甚だしい。この分では懸命にとらねばならぬ。加藤内閣が成立する(六月三)。

▼六月四日

今日は学校の運動会。五時頃

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

【67】

ある。中アバ縄二〇〇丸、並アバ縄八〇丸の契約をする。

▼六月五日

天気快晴。昨日の運動会は曇り空で寒いくらいだった。今日は晴天。こんな天気だったら良かったのと思う。農園も雨で四日程休んだので巢虫でひどい。私も九時頃から行く。四十九号・十三号の虫取りだ。リングはずいぶん大きくなった。こん

に火花が揚がり、子供らが勇んで起きたが大騒ぎだ。七時から始まる。曇り空で寒いくらいだ。悦三をおんぶして運動会を見に行つたが、九時頃からポツポツ雨が降り出したので皆は落胆、

雨は降る。私らは平の売店に入つて雨を避ける。生徒は学校へ入つて休む。三〇分程で幸い雨も上がつて晴れ間も見えたので再開した。ようやく天気も定まつてきて、人出も多く多く賑やかだつた。ⓧから大謀アバ縄の照会が

なになつてから巢虫にやられるとは、実に気がもめることだ。帰つてから自転車であちこちへ出面を頼みに行き、三人頼むことができた。

▼六月十六日

起床六時。今日は春の大掃除なので早くから準備に忙しい。昨夜、沢江へ行つて頼んできた出面と家の者一〇人程で大掃除にかかる。一時過ぎに終わる。天気で良かった。どこも衛生掃除で忙しい。午後から農園へ行

く。出面一〇人頼んだので仕事もずい分とはかどる。家からも出て全部で一五人でやる。蒸し暑くなり、雨でも降りそうな天気模様になった。夜一二時頃から大暴風になり、家にいても気味が悪い程だ。起きて外を見ると困でも起きている。そのうち、杏その外と仲町、新開町、土場を巡回する。一時過ぎに帰る。明け方になり大分おさまる。

▼六月十七日

昨夜のような突然の暴風は近年稀だ。屋根、看板、塀などどられたところがある。蒸し暑く午前中時々雨が降る。雨の合間に虫取りをしたが、雨が止まないのので午後から休む。

▼六月十八日

快晴だが蒸し暑く夏のような気温だ。今日も出面と合わせて一五人で虫取りだ。

▼六月十九日

美国ⓧから、アバ縄を受け取りに馬車が八台も来る。中アバ縄二〇〇丸、並アバ縄八一丸、みご縄一〇〇把を渡す。大謀となるとずい分使うものだ。今後也大いに力を入れ、この方面にも活動せねばならぬ。

▼六月二日

起床八時、天気快晴、相変わらず虫取りに一生懸命だ。午前中銀行へ行き、坂崎へ上半期分三七〇〇円と、㊦へアバ縄代五〇〇円も送金する。㊦からの電信によればアバ縄は非常に高値の由。午後、田の畑を見に行くと袋掛けをしている。ちょうど困の主人も来ていて、いっしょに支店の畑も見回る。手入れもよし、木も若木なのでずい分成っている。二〇余人で袋掛けをしている。松林を通り私の畑を見回ったが、上の畑では巢虫で赤くなっている。中の畑は五人の出面で巢虫りの最中だ。余り本数が多いのと、木が大きいので手が回りかねる。今秋には、上の畑の方は大分切らねばならぬ。夜、三山神社宵宮祭で、踊りがあるというので大そうな人出だ。

▼六月二日

起床七時、曇天、三山神社の祭礼で、一〇時過ぎ、神輿が家の前を通って沢江方面へ行く。町内では旗も立てず、砂盛りもせず、手伝いの人夫と旗持ちなどの男の子が僅かばかりで、いたってさびしい祭礼の行列だ。午前

中、リンゴの袋用の針金を買う客が来る。午後から農園行き。少しの間にリンゴも玉も大きくなつた。今日も中の畑の巢虫取りだ。上の畑は巢虫で赤くなつてしまった。夜、子供らと三山神社の踊りを見に行き、九時頃帰る。

▼六月三日

未明から雨が降る。本年の天候は晴天と雨との具合がよく、実に申し分ない天気だった。従つて作物の出来もよろしい。沖村、沢江、新地方面の掛け取りで四〇〇円余り受け取る。出面賃は高値で、これは学校の普請に大勢来ているし、余市方面がリンゴの豊作で袋掛けに大勢行っていることや、カムチャツカ行きなどが多いためで、賃金の余り値上がりするのには困る。午後、熊さんは人夫三人とリンゴの袋掛け、妻は花苗やナスの苗植えをする。私も四時頃から上の畑の虫取りをやる。若木だから玉も見事だ。あと一日虫征伐をやり、その後は袋掛けだ。七時頃帰る。安藤へ改良網を照会したら「ネ43、五〇マルアル」と返電。明日「40ナラミナカウ」と電報するつもりだ。

▼六月二四日

天気続きでリンゴにはよろしい。一〇時頃から農園へ行き、上の畑の虫取りをやる。巢虫も大きくなつた。近々中にはガになるだろう。午後からは妻も来る。熊さんは出面七、八人と五十八号に袋掛けだ。ずい分と成つた。上の畑は巢虫のため赤く枯れたのが多い。十四号だけは助かりそう。巢虫さえなければ上の畑もずい分成つたのだ。㊦からえびす縄など二七個を三穂丸が積んで来た。アバ縄は品不足で暴騰との由、手持ちが少しあるのが幸いしたようだ。

▼六月二五日

朝曇天であつたがだんだん天気になる。農園の方はリンゴの袋掛けで忙しい。下草は生えてくるし、出面もなかなかなくて困つたものだ。今日も家の者共に一〇人くらいでやつている。新地方面へ出かけたが、電気会社で開業披露祝宴会があり、招待客も大勢で、ずい分と賑やかだったとのこと。

▼六月二六日

昨夜八時頃から雨が降り出して、今朝八時頃まで降り続いた。

海は近来稀な程の時化、余市通いも止まる。風が寒く手が冷たいようだ。店は袋と針金の客が多く来た。袋は品切れになつた。午後三時頃から農園行き、妻も行き、ナス苗などの植えつけや下草取りをする。ナシの袋の見落としの袋を掛ける。夕方になると風がますます寒くなり、手がかじかむようだ。七時頃帰ったが、出面が足りないというので熊さんが頼みに出かける。

▼六月二七日

今日も天気は快晴。袋掛けが忙しいので熊さんは六時頃から行く。店は閑散。父が店番をし、私も九時頃から行く。出面も七人頼むことができた。空は一点の雲もない青空で実に申し分ない天気だ。巢虫の方も一段落したようで、虫を取った木は青々として元気が良くなつた。玉もずい分と大きくなつた。昼食は畑の家で、お湯も沸かせなかつたが、仕事の後は水を飲んでおいしいものだ。運動は何よりの薬だ。

▼六月二八日

起床六時、熊さんは五時頃から行っている。袋掛け中は忙し

い。午前中店の帳簿整理をし、午後から農園行き。風が強くて高い木に上がれないので、下の畑の一号、九号、十四号などに袋を掛ける。私は三角畑のナシに袋を掛けたが、見事な玉になっている。七時頃までに三本掛けた。三角畑のリングゴの若木に多少実がついた。七、八年経てば立派な木になるだろう。七時半に帰り、食後お湯に入ったが気分がよい。

▼六月一九日

天氣快晴。農園では袋掛けに一生懸命だ。私も八時頃行く。出面も一四人来た。天氣が良かったのでリンゴも太り成績もよろしい。虫さえつかなければ本年はずい分成つたはずだ。しかし精一杯尽くしたのでどうにか助つた。今秋には実りの悪い樹や大木の枝を切り、害虫の駆除をしやすいうようにしてかからねばならぬ。七時に帰る。夜、父は困へ七回忌の法事に行く。

▼六月三〇日

起床六時、未明に小雨が降つたが間もなく晴れた。今日も袋掛けで出面が一五人来ているとのこと。月末なので新地町、港

町、丸山町、入船町と合に寄り
二〇〇円受け取り、しばらく話
をして一時頃帰る。午後は新
開町、畑町方面を廻る。父は困
法事で寺参りに行く。かねて心
配していた、又から三〇〇円の
入金があり、残りは延期にした。
○寿原から中村君の掛け金のこ
とで督促が来た。中村君に問い
合わせたところ、一か月の遅滞
もなく納めているとのことなの
で、早速、寿原へ行き話をした。
無尽会社はいったい何をしてい
るのか、談判せねばならぬ。

▼七月一日

快晴、リンゴの袋掛けて皆一生懸命だ。午後、銀行へ行く。店はリンゴの袋や針金の需要も一段落したのか閑散だ。三時頃から農園へ行ったが、今日は一人の出面が来てやっている。

▼七月二日

起床七時、今曉三時頃から雨が降り出した。天氣が続いているので作物には良い。リンゴの袋掛けで皆疲れているので、ちようどよい雨で骨休めができる。熊さんと二人で田へ送る綿網二個荷造りした。雨も一〇時頃になつて晴れてきた。困支店

ヘリンゴの袋九万枚程届ける。
平田さんへ和台会の帳簿整理の
手伝いに行く。午後四時頃農園
へ行く。サクランボも色づき始
めたので、カラス予防の釣り針
などを吊る。

▼七月六日

昨日の夜明けからの雷雨が激しく、大雨となった。今日は曇天だが雨はない。農園では袋掛けだ。美国から袋を買う客が来る。午後三時頃から農園へ行く。今

日は総勢二〇人程でやってい

る。十四号の畑は終わり、玉は見
事な程大きくなった。今までで
総計一〇万は掛けた。

▼七月七日

朝方は曇天であつたが、袋掛けに皆出かける。午後から雨になり休む。岡崎さんが小樽から来たので、小林さんと三人連れで、雨の中田まで行きサクランボを食べた。帰り④公園に寄り見物する。公園は年ごとに良くなる。別荘を普請中だ。ビールを飲み三時頃帰る。雨はなかなか止まない。

▼七月八日

曇天であやしい空模様だが、熊さんは五時頃から農園へ行

く。※重助大工が来てリング用のはしごをこしらえている。左官さんは倉の戸前の仕上げをしている。時々小雨が降りうつとらしい天気だ。入梅か。

※館岡重助 昭和七年一月三日、沖村山中で一日に熊三頭を仕留めたというので、古平町内の大きな話題になる。大工としても「腕のいい大工」として評判だったという。

▼七月九日

長らくの雨も、今日は一天拭
うが如き青空になった。新聞に
よれば函館では、摂政宮の滞在
中は市中に日の丸の旗を掲げて
賑やかだったという。明日午後
五時頃には小樽に到着されると
いうので、古平からも拝観や招
待された人が大勢出かけるよう
である。今日も農園では袋掛け
だ。積丹西河から客があり、刺網
一〇〇間売れたが大分勉強して
やった。私も三時頃農園へ行く。
せっかく玉が大きくなったの
に、チョッキリ虫がついて卵を
生み付けている。もう一〇日程
も早く袋を掛ければよかった。
失敗した。明年からは気をつけ
ねばならぬ。(続く)

(続)

かつての鉱山マンが

古平に大集合

富山市 高橋 藤蔵

(元・稲倉石鉱業所勤務)

私はいま、六月二十九日に古平文化会館で開く「稲倉石会」の準備に追われています。

稲倉石会とは、昭和四十年代まで稲倉石鉱山で働いていた鉱山マンが、売山・閉山によって

住みなれた鉱山を後にし、全国に離散してしまった豪の山男たちの集まりで、古くは五十年振り、最も短い方でも二十年振りに旧友を温める事になり、全国各地から心の古里となった此処古平に集まる事になりました。

最盛期の稲倉石鉱山は、従業員一、〇〇〇名余、国内一のマンガンの採掘量を誇り、その存在を全国に覇せていました。

地下資源を相手とするこの種の産業は、地下に埋蔵されてい

る資源を掘り尽くせば、閉山・廃山となる宿命を背負っており、稲倉石鉱山も避け得ないこの宿命を受ける事になりました。

売山によって離散したかつての山の仲間と、再会の機会をつくりたいという構想は、六・七年前から抱いていたのですが、頼みとする親会社もすでに他社と合併し、社員台帳もなければ会員の住所も分からず、そして調べる術もない中で

「苦労を分かちあった旧友と会いたい」

「会わせたい」

との思いが、有志の賛同と協力によって、二五〇名余の会員に案内状を送る事が出来ました。

雑務を預かる事務局を引き受けたものの

「参加します」

との返事は遅々として集まらず「集まるのは、せいぜい八〇名位か」

と半ば諦めかけていた私を元気づける便りが、続々と届くようになったのです。

締め切り近くになってワンサと参加の申し込みが殺到し、実に一三〇名前後が集う大会合となりそうなのです。

お陰さまで、当日参加者に差し上げる「会員名簿」「参加者名簿」「会員の近況」などの追加作成と、諸準備に終日振り回され、寝不足と嬉しい悲鳴の日々が続いております。

そんな中で、この会の開催にご協力を賜りました古平町当局のご厚意は、何者にも勝る援軍となり、会を仕切る私たちの大きな心の支えとなりました。

いまは、稲倉石鉱山を知る人も少なくなったと聞いておりますが、古平の歴史の一時期中で、消すに消せない凜とした存在であった事を誇りに思い、全会員が古平に集まるのは、最後ではと思いますので、心ゆくまで語り合い、心ゆくまで笑い合います。

人の息吹が絶えた稲倉石の山峡は、かつて私たちが生活の場としていた面影のすべてを消されましたが、目を閉じれば、木々を渡る風の音と小さい沢の流れは、往時と変わりなく、これから永遠に続く事でしょう。

(六月十六日・記)



古平いろいろはうた

七軒町茂みの 中に名が残り

□七軒町という地名

昔の町名には何かそこにある特徴のあるものや、そこに関係したことがらから命名した、というものが圧倒的に多い。戦後生まれた地名には、どうも語呂合わせやイメージ的なものが多い、どこにでもあると言われるのは銀座だが、有名なところのあやかり地名も結構ある。

古平で「七軒町（しちけんちよう）」という地名を知っている人も少なくなってしまった。戦前でも、地名は聞いたことがあるがどこにあるのかは知らない、という人はいた。

古平にもアイヌ語の地名が三〇数か所あるが、七軒町は和名であることから、移り住んで来た人が付けた地名である。

□七軒町の名の由来

この場所は、群来町を通る旧

道縁の稲荷さんの祠から、左手

の山に入ったところに広がる一帯の平地で、昭和の始め頃まで人家があつた。鯉漁で繁栄していた明治の末頃から七軒の人家があり、漁業と付近の平地を開拓して副業として農業も行っていた。

当初、七軒の人家が建つていたことから七軒町——何とも単純明快な地名で、そこに住んでいる人たち一人ひとりの、自分たちの住んでいる土地への誇りと強い愛着が感じられる。

その後、どんなにか住みやすいところだったのか、人家が増えて九軒住んでいたようだと、指折り数えて言う人もいるがどうもはつきりしない。

七軒町という地名から物語として、住んでいたのは七軒！というのが何となく夢があつて

いい。

鯉最盛期の群来村には七〇軒を超える人家が、海岸近くから崖のくぼ地に立ち並んでいた。山ひだからは沢水が流れ、地形は丸山岬と厚舌岬に囲まれ、突出したところでは風は強かったが、後ろに山を背負っているので風はそれ程強くは当たらない、と住んでいた人たちは言う。

□草むらをかき分けて探訪

消えていく七軒町を確かめたいと、山には詳しい中村良介さんに案内されて歩いて見た。

ふるびら温泉から七、八百メートル程歩いて、旧道の右に稲荷さん、向かい合うように左側に建っているNTTの小さな格納庫を右に見て、狭くゆるい坂を上ると木立の中に平地が開けてくる。時期は五月下旬だったが、みずみずしいフキがそれこそ鎌で刈る程びっしり生えていて、近くを小川が流れている。

一〇〇メートル程も行くと小さな物置小屋が建っていて、昔、七軒町にもいたことがあるという竹内コトさんから聞いていた、

竹内さんの小屋だった。

人家が絶えてからは自然にまかせ、いたるところに大木があり、木立が茂っている。思つた以上に平地は広く、このまま進むと美国の宝島が見える場所に出ると、ガイド役の中村さんが教えてくれる。（この稿続く）

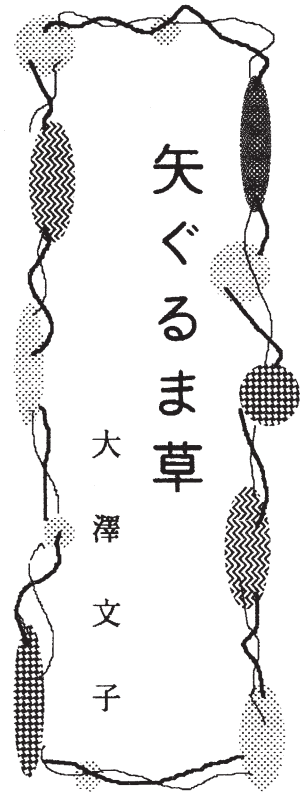
←いちめん草に覆われた七軒町
住居と畑の跡（平成13・5）



お詫び 都合で今月号の「泣き笑いの樺太漁場体験記」はお休みします。また次号からご愛読ください。

矢ぐるま草

大澤 文子



「いいなアー春は……」海沿いの崖下に淡い紫のカタクリの花を見つけた時、思わずひとりごとがでる。この花を見つけると一気に冬ごもりから解放され、それこそ目を洗われる思い。

カタクリは百合科の多年草。

花言葉は『初恋』とか。昔から親しまれている花で、万葉集にもカタカゴ（堅香子）の名で歌われている。その根に上質の澱粉をふくんでいるため食用にもなっていた。

食料難だった戦前にはこの可憐な花で飢えをしのいでいたという。

「真実寂しき花ゆえに一輪草とは申すなり 一輪咲いたが一輪草、二輪咲くのが二輪草」……と歌ったのは歌人北原白秋。細い花柄の先に一輪の花をつ

けるのでこの名で呼ばれ、イチゲンソウ（一花草）の別名もあるという。ちよつと春の郊外へ足をのばすと道端の笹の下などによく見かける。気品のある純白の花は疲れをいやすのに充分である。

わが町でも、春になるといち早く浜ひる顔の花が咲く。蔓はところ嫌わず伸び、緑葉のかけにうす桃色の花をのぞかせる。手折つてきてグラスにでも……

と思うこともあるが、あまりの可憐さにしやがみこんで眺めるだけにとどめる。砂地を好む浜茄子の蕾もふくらみ、咲きはじめるのも間近であろう。

辛夷、木蓮も競うがに咲き、百花繚乱とでもいおうか、一年中で一番すばらしい季節である。また、それぞれの季節によ

って、咲く花の色合いも違うというので楽しい。

冬ごもりから解放された時咲く花は、ピンク、うす紫、白系が多いという。六月頃には海の色に似て青色が多く、夏になると真紅系の強烈な色が炎天下に燃えるという。

初夏の草花の中でも、ひと際さわやかな花といえば矢ぐるま草がある。藍紫色、桃色、白等々優しい花を咲かせる。

歌人石川啄木の歌に「函館の青柳町こそかなしけれ友の恋歌、矢ぐるまの花。」でもよく知られている。啄木は明治四十年五月はじめ函館に着き、やがて青柳町の家にはばらく住んだ。初夏の頃の作である。歌人石川啄木の代表作のような歌で一般にもよく知られている。なんともなくもの悲しい作である。

私共一家は大正十四年春、教師であった父の転勤により、新潟から津軽海峡を渡り札幌に住むことになった。南大通り西十九丁目の裏庭の広い一軒家であった。父の教え子の学生達がよく遊びに見え、小学生だった姉

と私は、部屋の隅っこの座り机で一生懸命勉強していたことをフツと思い出す。

花を好む父は早速、学生達を相手に花壇作りを始めた。小石を集め、四角に仕切り格好な花壇が出来た。父の一番の好みは矢ぐるま草だった。その他スイートピー、コスモス、百日草、金盞花等々見事に花を咲かせた。そのとりどりの花盛りの中に、家族全員埋もれて写した何枚かの写真は懐かしい。

矢ぐるま草をこよなく愛した父は「母の日」に夏帯を母に贈った。白地に藍紫の矢ぐるま草が二輪美しく描かれた絹の帯だった。ほっそり型の母にはよく似合いすてきだった。

母はその帯をしめ、父とよく歌舞伎見物に出かけた。父の後から小刻みに追って行く母の姿こそ、本来の日本女性の姿かも知れない、ふとそんなことを思った。

今年こそは……と、窓下に矢ぐるま草の種を蒔いてみた。が芽ばえを伝えるべく父はもういない……。

「ほいと」

物語

吉 川 義 雄

ハナからそのつもりはなくても、結果として人様の家で食事をしてくる私を、母は怒って「ホイト」と言った。

当人は別に悪いことをしてはいらなかつた。鮎釣りの大漁の日、ついに上がり込んで何匹平らげて来たものやら。福岡菓子店さんも、一家を挙げて私を歓迎してくださつた。

同級生の若山健三君が強いて私を連行したお宅。彼と長女の貞子さんの友情も聞かぬでもなかったが、役場の同僚、梅子さんの家でもあり、以後は私ひとりです。貞子さん、邦子さん、梅子さん、久子さんと、年頃の姉妹に小学生の弟さんと妹さん。

わが家とは全くあべこべの家。家族構成、明るさと優しさも、ガサツなわが家にはないもの。居心地の良さから何度このパラダイスでご馳走になったことか。何であんなに通つたんだらう。山口忠治さんも浪子夫人も、ただの一度もイヤな顔を見せることなく私を上がらせた。

ご夫妻といつしよに話をしていると、万般にわたつて知識が豊富で、しかもよく話を聞いてくれる。つい時間の注意を忘れて食堂まで場所を移させて続きを語ることになる。

一度だけの参上なら他にどれだけあつたやら、十指に余ることは自分で承知している。母の表現が的確とは思いたくないが、数で言われるなら間違いない。「ホイト」に近い。

子供の頃から人見知りと言われ、おとなしい子と烙印されてきた者が、どこで脱皮し、いつ頃羽化したものやら当人でもわからない。ただ二つ程遠因があるような気がする。

寺田のオツちゃんの上の学校に入るため、漁期の終わつた、ガランとして田岸の家で懸命に勉強していた。今年米寿を迎える兄さんの歳から逆算すると、当時の私は四、五歳。父に背負われて行くと、兄さんは勉強を止めて私の相手をしてくれる。構つてくれないと大炉の中に入り込み、消し炭を口いっぱい入れガリガリ食べる。次からいとも私に与える菓子が用意され

ていた。「ホイト」のハシリと思われる。

新場の哲彦秀才は、生まれも育ちも古平では威厳が邪魔して友達がいけない。学校ではほんの少し仲良くしたとたん、家の近いこともあつて遊びに来るよう猛アタックが始まつた。

私は、彼の話す本が見たくてたまらない。水汲み、薪割り、片付かない。種田家からはついに女中さんが迎えに来る。見栄張りの父は「いいから早くいげッ」と、むしろ喜んでゐる。

わが家の夕餉は、たいてい鯨の姿が群来ているさんべい汁に決まつているから、新場の湯豆腐が新鮮な味となつて私の晩餐となつた。

わが家が長男を養つたための、私に課す重労働から解放され、新場の哲ちゃんのところと云うと、早く行こうと遅く帰ろうと、父母は一切文句を言わな。たまにはおみやげの菓子を持参して帰館するから、妹や弟たちの期待も大きい。

要するに、幼年時代から父母公認の「ホイト」の芽が育つていたようだ。

— 轉 属 — (續)

列車の中へたびたび見回りに来る引率の将校は、盛岡の連隊本部で兵隊上りの年配の中里中尉といい、連隊でも有名なうるさ型だと檣岡上等兵から聞いたことがある。あだ名は

『中里じっちゃん』何し古武士を思わせるような風貌で、列車の床にタバコの吸い殻やマツチ棒一本落ちていても駄目。

「軍人は地方人の模範になるように行動しなくてはいけない」

そのうるさいこと、一時
間おきぐらいい見回りに
来ては文句を言われるの
には参った。

札幌駅に到着した時に

は、さすがに車内にチリ一つ落ちてなくて、掃き清めたようにきれいだつた。これで『中里じっち

やん』は大満足のようだった。

— 月寒・北部八二部隊 —

中里中尉に引率されて、札幌郊外の月寒にある北部六三部隊の営門を入った。この六三部隊

というは昭和一八年五月、北海道の警備が軍司令部から下命され、従来の現役兵と道内・道外の歩兵連隊からの転属者と、予備役の召集者によって編成された部隊である。当日は驚いたこ

— 老兵の綴り方 —

あゝ樺太国境守備隊

橘 義 春

とに、予備役の召集者が続々と入隊し、旭川からの転属者がこれもまた大勢やつて来た。全員が演習場に集められ、各中隊へと配属された。

れた。

私たちの

配属先は二
中隊に決ま
っていたが
なぜか館山

だけは他の中隊に配属になった。さぞかし心細かったであろう。二中隊から下士官が迎えに来た。藤山軍曹と名乗り私たちを二中隊へ案内した。

現役兵・予備役召集兵・転属兵の全員が揃ったところで、今度は各班への配属が決まった。

中隊長は中村勝美中尉、中隊指揮班は大国武夫見習士官、坂東常義准尉、藤山政市軍曹、大西昇軍曹、下向正雄軍曹、私たち的小隊長は伊藤軍曹、分隊長は中田伍長、擲弾筒を烹くこのベテラン班長である。盛岡以来の戦友であつた山下弘と新川は他班へ、私は本間徳男・田中悦蔵・松谷久美と共に中田班長の分隊に配属になつた。

いよいよ樺太へ――

樺太への移動準備で毎日多忙な日が続いた。新品の被服と兵器が全員に支給され、連隊長若村覚司大佐のもと苗穂駅の引込線から列車に乗り、一路稚内へと向かった。

稚内駅で荷物を貨車から連絡船へ積み替える仕事をする。七月なので暑く、上半身裸の作業だった。稚内の娘さんたちが、背負いコブを背中に大勢働きに来ていた。私たち兵隊が、重い大きな荷物を背負いコブへ乗せてやると、いとも簡単に運

んで行くのには驚いたり感心したり、稚内の女の子は力持ちが多いなアと思つたり……。ともかく若い娘さんたちとワーワーガヤガヤと、おしゃべりしながら働いていると楽しくて、軍隊の辛さなんか忘れてしまいそうだった。いつもならこんな重労働にはみんな「ブーブー」言うところだが、人間とは現金なものだ。

やがて連絡船に乗船。とうとうこれで北海道とも当分はお別れか。樺太とはどんなところか、ただ冬のものすごい寒さだけは聞いているが、今は自由の身ではない。とにかく成り行きにまかせるしかない思いながらも、不安は隠しきれないものがあった。

船が動き出した。退屈なので船内を見ていたら、向こう側に私の郷里の小学校で一年先輩の、松岡外与造さんによく似ている人がいる。他人の空似かなと思ひながら見ていたら、どうも本人らしい。間違っていたら謝ろうと思ひ、側へ行つて声をかけてみた。

（続く）

〈続〉

俳句鑑賞

お楽しみコーナー

三笠宮若杉殿下の句集

今一冊の句集を繙いています。

句集の名は『初雪』、著者は三笠宮若杉殿下と同ゆかり妃殿下の共著で、昭和三十三年十二月新樹社から刊行されました。序文は高浜虚子が書かれています。序文の冒頭に、

熊谷草見せよと仰せありしとて 若杉
熊谷草を見せよと仰せありしとか 虚子

この句は、昭和天皇が吹上御苑に熊谷草が咲いているが、ご覧になられよと仰せられ、そのことを許に御殿の霜錦亭の句会で出句されたと、記されています。

三笠宮若杉殿下は虚子・立子門の俳人で、昭和二十二年頃から俳句を始めておられます。

北海道へは虚子に同道してたびたび俳句大会に出席され、小樽の鯉御殿銀鱗荘でご一行の歓迎俳句大会が催され、父悠々子も出席したとの話は聞いていました。

さて、句集・初雪ですが、昭和二十三年から昭和三十二年までの俳句が収録され、新鮮な感覚で作られた佳品揃いです。数句を掲出すると、

何語る鼻すり合はせ母子馬 若杉

俳誌悠 主宰 水 見 壽 男

遠くまで畝の向き見せ雪残る
山小屋の春灯淡くニセコ晴る
飛び下りるスキーひびきて雪固し
秋灯に江戸文学を論じつつ
論文の筆は進まず閑古鳥
春宵を異国の人と酒をくみ

実は、玉藻七百号記念大会が椿山荘で催されたこのとき事務方のお手伝いした関係で、若杉、ゆかりの両殿下にお会いしたのが最初でした。そのあと犬山城主成瀬正俊さんの出版記念会が、昭和六十三年九月に霞が関ビルで行われときは、パーティの席上で親しく昔の渡道のお話など伺いました。

近くでは星野椿先生の俳句とともにの出版記念会が日比谷の松本楼で催され、その折乞われてお祝いを述べたのですが、若杉、ゆかり両殿下もご臨席しておりましたので、両殿下に再び俳句復活をお呼び掛けしたところ、微笑んで応えていただきました。両殿下の句集・初雪は、畏友越野清治古平ホトトギス会長が所蔵しておられます。重文クラスの奇観本と言えます。

編集雑記

▽晴天に夏を満喫しながら、こうもまた雨が降らないのも心配です。農作物にも被害が表れてきたとか、自然は何事もバランスが大切です。
▽昭和三〇年代には、生産額を漁業と分け合ったこともある稲倉石鉾山の関係者が、懐かしの古平で稲倉石会を開くというので、資料をまとめ冊子を作りました。今さらながら往時の繁栄ぶりがしのべれます。
▽過去の統計では、七月より八月の平均気温が一〜二度高く、九月になると急に四〜五度低くなります。お祭りが古平の盛夏を告げます。
▽古平町の海岸線は約一〇二きありますが、間もなく完成する歌葉沖町のトンネル、豊浜郡境沖町のトンネル、丸山岬の通行禁止の区間があり、歩ける海岸線は約半分の五き余りになってしまいました。
▽二三日は暦では『大暑』、字のとおりで暑さも絶頂？ これも我慢
▽二七日は土用の丑(うす)の日夏の暑さに負けないように、とでもいうのか以前だと夜、海岸で火をたいて泳いだりすることもありましたが、今はうなぎを食べる日——、と思っている人が多いようです。

短歌

吉平町岬短歌会

鯨場の賑はひたりしこの浜の思ひ出胸の我のひと代ぞ
波引きて濡れ光りある砂浜よ幼な日のごと走りてみたし

池田 テル

鳩らにも食はれず枝豆は太根の合間あひまに新芽出揃う
棒を立てぐるりと植ゑしグラジオラスなべて活きよく
間引きためらふ

鈴木 時子

この季節裏山で鳴くうぐひすと蝦夷春蟬はコーラス
の如し

いつの日か別れは常にあるものと思ひて今日は故郷離る

田中 香苗



吉平俳句会

沙羅の花一ト日の命惜しまるる 斉藤波留

沖繩のパイナップル畑や基地静か 山口悦子

有珠山の噴火のあとや夏霞 越野敏雄

新築の通し廊下に武者人形 大和田絵伊

毛虫とて生あるものの住む大地 関口勝志

なんとなく人の悲しき夜半にして流れ星一つゆくり
なく見ぬ

静寂は海底の如き病院の真夜に時折ナースコールの音
心とむ

堀 典子

とまりん館に原子炉の説明聞き乍らひたすら思ふ
無事故にあれと
車窓より見上ぐるアカシヤの花房の今年は短かく
小さく咲きぬ

丹後 初江

古稀の旅おしやれ気分サングラス 高橋重子

出て来さふ光源氏や簾かな 仲谷比呂古

小女子の漁あるらしく灯の揺るる 室屋弘子

熊蜂の飛び交ふ庭に小雨降る 泉清三

北国の少し早めの夏衣 外山俊久

初夏の声湧く白樺の木立より 越野清治

幸平 吟

烏賊船の見送りをせし漁夫家族

お喋りの客たたしむるはたたがみ
縁談の話は秘密蟹の足



古平町史年表

15

大正2年(1913) ～続き

▲北海道庁から保原元治技師外2名が来て、古平漁港築設調査をする。

大正3年(1914)

▲この年の鯨漁には行成網(従来の古い型)22か統、角網(新しい型の網)56か統の計78か統が建てられた。

漁獲高は35,500石(約26,600ト)でこれは明治以来2番目であった。

大正4年(1915)

▲梅野吉太郎外151人が無限責任大典記念古平信用組合設立の認可を受け、代表理事梅野吉太郎方に事務所を開設する。

▲小樽～美国線航路に美国丸(佐藤与助)・古英丸(斉藤文雄)・積丹丸(小町泰次郎)・大勢丸(村田喜三郎)が不定期運航をする。

大正5年(1916)

▲町立古平裁縫学校を古平尋常高等小学校に併設する。

▲沢江村で子供の火遊びから7棟10戸を焼失

▲入船町の吉田幸潮網倉1棟が焼失する。(吉田一穂実家、この火災により以後の学資も途絶えたことなどから、早稲田大学を中退する)

▲アメリカの飛行家スミスが札幌に飛来し、飛行機が墜落、負傷する。これより9年後、初めて古平に飛行機が飛来する。

▲12月末現在の古平の人口9,215人

大正6年(1917)

▲洪水で浜町新開通り、沢江村で床上浸水35戸、床下浸水50戸余り、畑約20町歩が冠水する。

▲函館の国屋忠五郎が稲倉石鉱山でマンガンを採掘し、馬車で浜町の海岸まで運搬する。

▲高野平治が鴨居木にでんぶん工場を建設する。

大正7年(1918)

▲12月末現在の戸数1445戸・人口8541人

大正8年(1919)

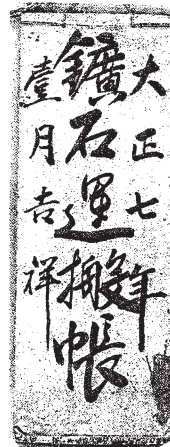
▲古平消防組の編成が改正され、第1部 浜町・沢江村・歌楽村 39人、新地町・入船町・丸山町・群来村 47人、第3部 沖村 25人

→古平信用組合設立発起人
裁縫学校に学ぶ生徒↓



→鉱石運搬台帳(盛商店)

浜町大火の焼け跡↓



→三山神社御祈禱札

